# 県立図書館だより

令和元年１０月　　　　　　　　　　　　　　　　青森県立図書館報　第３５号

青森県近代文学館では本年 10 月 26 日（土）から令和２年１月 13 日（月・祝）まで、企画展示室において「今日出海展―直木賞受賞から 70 年―」を開催します。

今日出海（こん・ひでみ）は明治 36（1903）年に函館で生まれました。父・武平（ぶへい）と母・綾（あや）はともに弘前出身であり、長兄の東光（とうこう）も後に直木賞作家となります。

旧制浦和高校を卒業した日出海は東京帝国大学に進み、演劇や文筆活動を開始。昭和７（1932）年からは明治大学文芸科で教鞭を執ります。戦中は陸軍報道班員としてフィリピン従軍を経験。昭和 25 年に「天皇の帽子」を発表し、第 23 回直木賞を受賞しました。昭和 43 年から 47 年まで初代文化庁長官を務め、昭和 59 年に 80 歳で世を去りました。

没後 35 年そして「天皇の帽子」による直木賞受賞から 70 年という節目に当たり、直筆原稿や著書、作品掲載誌を多数展示し、作家・今日出海の生涯と足跡をご紹介します。

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

目　　　　　次

企画展「今日出海展－直木賞受賞から７０年－」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1
知ってほしい！県立図書館　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2
こどものひろば・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3
こんなレファレンスがありました ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ ４～７
ご存じですか？この人・この資料 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 8
ようこそ文学館へ！・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 9
カウンターからひとこと・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 10

知ってほしい！県立図書館

# 市町村立図書館等への支援について

令和元年１０月１日現在、県内４０市町村中２３市町村に図書館が設置されており、図書館が設置されていない市町村では、公民館図書室が図書館の役割を担っています。

青森県立図書館では、県民のみなさんが県内どこに住んでいても、充実した図書館サービスを受けることができるよう、市町村立図書館及び公民館図書室等に対し、図書の貸出や図書館職員研修の実施等の支援を行っています。

ここでは、市町村立図書館等への図書の貸出を中心に紹介します。

〇一括貸出

県内の市町村立図書館や公民館図書室等で「県立図書館コーナー」をご覧になったことはありますか？

各図書館の「県立図書館コーナー」に並んでいる県立図書館の本は、市町村立図書館職員が県立図書館の本棚から選んだ本を持ち帰り、貸出の準備をした上で棚に並べています。

市町村立図書館職員の皆さんは、地域の住民の方々がどのような本を求めているのか、どのような本を揃えれば借りていってくれるのかということを考えながら本を選んでいますので、「県立図書館コーナー」は大変好評で、たくさん利用していただいています。

東北町立図書館の「県立図書館コーナー」

〇相互貸借

皆さんの探している本が地元の図書館等にない場合、職員に相談すると、地元の図書館では他の図書館から取り寄せて貸出を行います。

個々の図書館では、所蔵できる資料に限りがありますが、複数の図書館がそれぞれの蔵書を共有することで、よりたくさんの人に読みたい本を届けることができます。

住民の求めに応じて、“図書館同士”で資料の貸し借りを行うことを、「相互貸借（そうごたいしゃく）」といいます。

本県では、「青森県図書館情報ネットワークシステム」により、各館が探している本の所在を確認したり、物流の管理を行っています。

図書館・公民館図書室へのお届け

# こどものひろば

おはなし会での読み聞かせに重宝する絵本といえば、既存の絵本を大きいサイズで出版している大型絵本（ビックブック）です。子どもたちの目線を惹きつけ、大画面の迫力でお話が展開されていくのが大型絵本の魅力です。

このような形態の絵本が誕生したのは、1994 年。ベストセラー絵本『はらぺこあおむし』（エリック・カール/さく　もりひさし/やく　偕成社　改訂版は 1989 年刊）の出版 25 周年を記念し、大型絵本として出版されました。実は、ドイツにこの絵本の大型版があるのを知った母親のグループから、「日本でも大型版を。」との要望が起きたこともきっかけのひとつだったそうです。

通常サイズの『はらぺこあおむし』は、縦 22cm×横 31cm ですが、大型絵本のサイズは、４倍の縦 42cm×横 58cm。本を開くと、全長 116cm にもなります。

比較すると、こんなにも差が！
大勢の子どもたちが楽しめます。

通常版

大型絵本（ビックブック）

これをきっかけに、各出版社から大型絵本が次々と出版されました。

『100 かいだてのいえ』（いわいとしお/作　偕成社　2008）は、縦に開く絵本で、通常サイズは横 22cm×縦 31cm ですが、2009 年出版のビックブックは、横 21cm×縦 116cm の超縦長の絵本になりました。こちらは横開きで展開します。

116cm といえば、小学１年生男子の平均身長とほぼ同じ高さ。この大きさに、子どもたちは驚き、すぐに夢中になります。

シリーズの『ちか 100 かいだてのいえ』、『うみの 100 かいだてのいえ』、『そらの 100 かいだてのいえ』も、ビックブックが出版されています。

当館では、この大型絵本（ビックブック）も貸出しています。読み聞かせで、必ずこの日に使いたいという方には、使用予定日の３か月前からの予約も受け付けています。児童閲覧室にお問い合わせください。

ビックブック→
通常版↓

～　こんなレファレンスがありました　～
【第３２回】

# 故郷（ふるさと）の話題読み語り
# 「　幻の『青森日報』を追う　」

昨今では、ニュースはスマホで…という方も多いのでしょうが、幕末に始まり、文明開化の明治の到来とともに多数発行された「新聞」が、長年に渡りニュースを伝える主役でした。（江戸期の「瓦版」もありますが、「新聞」のおはなしです。）

青森県では、明治１０年に発行された『北斗新聞』に歴史が始まりますが、経営が安定しない中、『青森新聞』、『青森新報』と、多くの新聞が発行され、消えていきました。

そのような新聞の中には、魅力的なものがたくさんあります。

大正後期から昭和初期まで弘前で発行されていた、花柳界の御用新聞『茶太楼（ちゃたろう）新聞』は、反骨のジャーナリスト宮武外骨先生も顧問で、気骨溢れる紙面に加え、在学中の太宰治が短歌を投稿しているなど、太宰研究の上でもとても貴重な新聞です。

当時の新聞は、発行部数が少ないことに加え、様々な物を包んだりなどと使われることも多く、現存しているものが少ないため、実際に目にすることができないものが殆どです。

今回は、そんな現存紙が少ない古い新聞についてのご質問です。

**【質　問】**
**「幻の『青森日報』発見！」という記事の載った、新聞とか雑誌を見たんだけど、『青森日報』って、どんな新聞だったの？**

明治期の新聞を調べていくと、少なからず混乱の渦中に身を投じることになります。

短期間に多くの新聞が発行されたため、「青森」、「陸奥」などの地域名に新聞、新報、日報と付けられ、混同しやすい新聞名が続くばかりではなく、経営が安定していなかったため、経営者や新聞の性格（御用紙から政党の機関紙に変わるなど）の変更によって、新聞名が二転三転したり、自紙に「老舗」的なイメージをつけて売ろうと、既に廃刊した新聞の名前を使って発刊号数を引き継ぎ、自紙の号数を、謂わば水増ししたりなどしたため、大変ややこしい状況になっているのです。

件の『青森日報』もその例外ではなく、『青森日報』と名の付いた新聞は二紙あります。

「えぇ！」「じゃあ、あの『青森日報』はどっちなの？」という、驚きと疑問の声が別のところからも聞こえてきそうです。何故ならこの『青森日報』という名前は、青森県の近代文学、とりわけ「方言詩」を語るうえで欠かせない新聞の名前だからなんです。

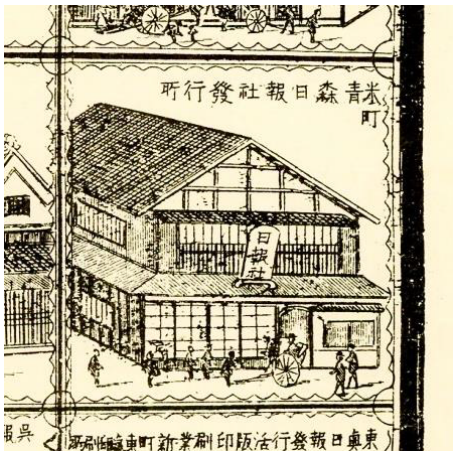
**「冷たい雨が降る晩で、社の首脳部は誰も居なくなり、新米で整理の見習いをやっていた私は編集部を代表して、薄暗い電灯の点った殺風景な部屋で、事務の引継ぎみたいなことをしたのであった。平川さん（※当時青森日報社主だった平川力のこと）から人員が揃うまで、どうでもいいから新聞を休まずに出してくれと言われ、その荷の重い仕事に返事に困った私を、黙って見詰めている福士さんの眼に気付いたのだが、それが何んとやさしい眼だろうと思った」**

と回想するのは、「雪女（ユギオナゴ）」「陽（シ）コあだネ村」などの心揺さぶる方言詩を生み出し、『津軽方言詩集まるめろ』などで知られる高木恭造です。

「福士さん」というのは、『太陽の子』をして既に口語詩の先駆的存在となっていた福士幸次郎、当時三十八歳。二人の邂逅の場となったのが青森日報社でした。恭造二十四歳、ここに、津軽方言詩、高木恭造の新たな一歩が始まったわけです。

さて、話を舞台となった『青森日報』に戻しましょう。

『青森日報』は二つの時期で名前が出てきます。




『青森実地明細絵図』（明治二十五年発行）
当時の米町にあった、工藤卓爾氏時代の『青森日報』の発行所部分。

最初の『青森日報』は、明治２４（1891）年１２月に、初代青森市長を勤めた工藤卓爾氏らによって「総選挙にそなえて」発行されました。工藤氏は翌２５年に衆議院議員に当選していますから、総選挙とあるのは衆議院選だったのでしょう。

ちなみに、工藤氏は、実は『陸奥新聞』の主筆を勤めるなど、新聞記者をされていた時代もありました。詳しくは、『工藤卓爾伝』をご覧ください。

この時発行された『青森日報』は、５０余号で終了し、廃刊となっています。当時、恭造は生まれていませんし、恭造と福士の出会いは、大正末期のことです。

方言詩の歴史の一歩を踏み出したのは、もう一つ、後年の『青森日報』のようです。

もう一つの『青森日報』は、明治１５年創刊の『陸奥新聞』を前身としていると言われています。『陸奥新聞』は、経営者や政治的立場、名前も何度も変え（ややこしくも何故か旧新聞名に戻したりし）ながら、大正９年、ようやく「陸奥」という名前を脱して『青森日報』という名前に落ち着きます。（その変遷は、最後の年表をご覧ください。）

大正１５年に経営不振に陥り、株式会社としては解散。『弘前新聞』支配人の太田鐵次氏が買収し、社長になります。この年、青森日報社に入社した若者が、高木恭造です。

弘前高等学校を卒業した恭造は、ある時、東奥日報社の入社試験を受けようとして出かけますが、運命の悪戯か、何故か途中にあった青森日報社の入社試験を受け、そのまま採用になります。しかし、青森日報社は、経営者が変わったとはいえ経営不振の真っ只中です。

当然、記者もおらず、恭造は、「とにかく新聞だけは発行するように」という上司命令を受け、慣れない記者生活に悪戦苦闘。今で言うなら「ブラック企業」でしょうか、右も左も分からぬまま、誰からも何も教えてもらえず、ただ叱られてばかりだったそうです。

そんな折、「救いの神」として登場するのが、当時、東奥日報社社会部記者だった、後の青森県知事「竹内俊吉」。何くれと無く助けてくれた氏との必見のエピソードなど、当時の様子は、「私の詩と真実」（『方言による三つの物語』所収）に詳しく書かれています。是非、ご覧ください。

さて、そんな殺伐とした日々を送る恭造に、運命の出会いが訪れます。同年１０月、弘前から、福士幸次郎が“主筆”として呼び寄せられたのです。

“何んとやさしい眼だろう”と恭造が思った福士の眼は、恭造が紙面の埋め草代わりに匿名で載せた詩を見つけ出し、方言で書いてみるようアドバイスをしたのです。その言葉を受け、恭造は初めての方言詩、「生活（クラシ）」を書きあげます。

このような出会いを生んだ『青森日報』でしたが、恭造は昭和２（1927）年春に退社し、上京、昭和６（1931）年１０月、方言詩集『まるめろ』を刊行します。

福士幸次郎はその序文で、恭造への賛辞とともに、次のような言葉を添えています。

**「わたしは之れを産んだ頃の吾々の共に机を並べ、埃だらけになつて働いた青森日報社の汚い編輯室生活を忘れる事が出来ない」**

福士幸次郎の心にも、様々な思いを残した青森日報社ですが、『まるめろ』が刊行された前月の９月１日に、「青森日報社争議」事件が起こっています。これは、当時の青森日報社社長、工藤鐵男氏（憲政会所属の青森市選出代議士）が、経営難のため給与を支払わなかったため、全従業員によるストライキが起こった事件です。警察が介入し、負傷者１名を出したのち一応の解決を見ますが、このことは『青森県百科事典』にも掲載され、歴史に残る事件となってしまいました。

こうして、様々な人の心に辛い思い出を残しつつ、幾度となく経営難に陥りながらも、「青森日報社」は、新社屋を建てるまでになります。

しかし、次第に戦争が激化。全国の新聞各社同様、用紙供給制限などの苦境に、何とか対応していた青森日報社（当時の社長：外崎千代吉氏）でしたが、昭和１６（1941）年１２月２５日、ついに国による「一府県一新聞制」の発令により、八戸合同新聞社、弘前新聞社、東北タイムス社とともに、東奥日報社に統合となり、長い歴史を閉じるのです。

昭和１２年頃撮影された、青森駅前の「青森日報社」の写真。（青森県立図書館蔵）

さて、お話しが長くなってしまいましたが、最初の**『青森日報』**（明治２４年創刊）は、今のところ現存が確認されていません。真に幻中の幻！ではあるのですが、お問い合わせの“新聞や雑誌等で話題になった「幻の**『青森日報』**」”は発見されているので、この二番目に登場する新聞、高木恭造、福士幸次郎に関わる新聞のことだったのです。

では一体、どのくらいの号数が、何処に残っているのでしょう。

「幻の新聞」発見の記事が最初に出たと思われる（確認できた）のは、平成８（1996）年のこと。

『きたのやかた』第２９号（「きたのやかた」編集室/編　北の会　1996）
「幻の新聞「青森日報」を発見！青森日報と高木恭造」（高木保/著）

この記事では、旧尾上町（現平川市）の旧家で、**大正１１（1922）年１０月２３日**付の『青森日報』が発見されたこと、雑誌が発行された１２月１０日現在で、当館を含め、県立郷土館、青森、弘前、五所川原の各図書館にも無かったことが書かれています。次に、

『東奥日報』夕刊第３面　平成１８（2006）年４月１７日
「福士幸次郎、高木恭造ら編集　大正の「青森日報」発見／六カ所の民家破損なく現存」

この記事では、六ヶ所村泊の目時氏宅で、**大正１１（1922）年１０月２８日**付がほぼ完璧な状態で発見されたことが書かれていました。更に、

『東奥日報』第２３面　平成１９（2007）年７月２９日には、
「青森　懐かしい街並み・風景　五拾壱番館　絵葉書など展示」

という記事があり、この展示では**昭和２（1927）年、昭和８（1933）年、昭和１０（1935）年**の**『青森日報』**が展示されたことが記されています。

その他、青森県史編さん室では、**昭和１０（1935）年１１月２６，２９，３０日**の、東京大学の明治新聞雑誌文庫では、**昭和２（1927）年２月１２日、８月１日、８月１６日（東京大学総合研究博物館では、大正１２（1923）年８月６日のものも所蔵されているようです）、昭和３（1928）年９月１２日**の新聞を所蔵されているほか、弘前市立弘前図書館では、青森日報社の株式会社設立趣意書や営業報告書が所蔵されているようでした。

以上により、利用者には**『青森日報』**の概要、当館に所蔵がないこと、現在発見されている号数、所蔵していると思われる場所などを説明して、レファレンスは終了となりました。

それにしても、未だその全貌を明らかにしない**『青森日報』**。もしかしたら、皆さんのお家にも、ひっそりと眠っているかもしれません。つい先日も、トルコのユルドゥズ宮殿にある屏風を修復しようとしたところ、１３３年前の朝日新聞などが発見された！と話題になりました。もしも見つけた際には、県立図書館にご寄贈ください！

さて、当館には**『青森日報』**の所蔵がありません…が、実は、断片的には所蔵があるといえなくもないのです。それは、『今白窓著作集１』を所蔵しているからです。

今白窓氏は、『北』『府』などの同人だった弘前市の詩人。この資料は、昭和５～６年頃の『青森日報』や『弘前新聞』等に掲載された氏の著作をクリッピングし、まとめられたも

のです。クリッピングと侮るなかれ。ページを捲れば、自身の記事のほか、恐らく新聞に掲載されていただろう写真をきれいに切り抜き、挿絵のように配置してあるなど、なかなかにハイセンス！見ているだけでも楽しい資料なのです。興味のある方は、是非ご覧ください。

お読みいただいた皆さん、「幻の新聞」、お分りいただけましたか？

以下に年表を書き出してみましたが、資料によって微妙に年代等の記載が違うなど、更に驚愕の錯綜ぶりが浮き上がってきました。「幻の新聞」という名は伊達ではありませんね。

東奥日報社発行『東奥日報百年史』を軸に年表を整理してみました。

何といっても現存する青森県の新聞社中、最も歴史があり、一番信頼がおけますから。

**【『青森日報』二紙の、発行から統合までの流れ】**

| | | |
|---|---|---|
| 明治１５年 | | 当時の県令、郷田兼徳氏のすすめにより、鎌田政通氏、猪股俊策氏が御用紙として『陸奥新聞』を発行（①）<br>※明治１３年３月２０日説もあり（②） |
| 明治１６年 | ８月　７日 | 『陸奥新聞』を『陸奥新報』に改題（①） |
| 明治２１年 | １２月　６日 | （『東奥日報』第１号発行（①））<br>（『東奥日報』第１号発行（①））<br>（『東奥日報』第１号発行（①））<br>（『東奥日報』第１号発行（①）） |
| 明治２２年 | ３月２２日 | 『陸奥新報』を『陸奥日報』に改題（①）　※明治２３年説も（②） |
| 明治２３年 | ４月１２日<br>１１月１１日 | 『陸奥日報』で火災があり社屋全焼、その後廃刊へ（①）<br>寺井純司氏が、陸奥改進党の機関紙として、題号をそのまま継続し、『陸奥日報』を発行（①） |
| 明治２４年 | ６月１４日<br>**１２月２９日** | 『陸奥日報』を『陸奥新聞』と改題（①）<br>**工藤卓爾らが総選挙に備えて『青森日報』を創刊。間もなく村谷有秀氏の管理に移り、５０余号で廃刊（①）** |
| 明治２９年 | ２月１１日 | 『陸奥新聞』を元の『陸奥日報』に再改題（①） |
| 大正　６年 | | 『陸奥日報』を工藤十三雄氏が買収（①） |
| 大正　９年 | | **『陸奥日報』が竹内清明氏の肝入りで政友会の機関紙となって改題、『青森日報』となる。**阿部政太郎氏を社長に、株式会社となる（①）<br>※大正１０年説もあり（②） |
| 大正１５年 | １０月 | **『青森日報』**、経営不振で株式会社解散（①）<br>『弘前新聞』支配人の太田鐵次氏が買収、社長に（②） |
| 昭和４年 | ９月　１日 | 代議士工藤鐵男氏が買収・経営者に（②） |
| 昭和６年 | ３月<br>９月　１日 | 創立五十周年と１万５千号の記念号発行（②）<br>「青森日報社争議」事件（③） |
| 昭和８年 | １月<br>６月１２日 | 大山岩美氏が社長に就任。工藤氏は社主・相談役に（②）<br>五所川原の『陸奥タイムス』社長の外崎千代吉氏が経営者に（②） |
| 昭和１１年 | | 青森駅前に三階建ての新社屋が竣成するも、移転準備中に火災のため大半を焼失（３月２７日）。間も無く復興、秋には移転が完了（②） |
| 昭和１６年 | １２月２５日 | 「一府県一新聞制」により、『東奥日報』に統合（①） |

［年表の参考文献］
①『東奥日報百年史』（東奥日報社　1988）
②『戦前新聞社・ジャーナリスト事典　第２巻』復刻版（井川充雄/編・解題　金沢文圃閣　2016）
③『青森県百科事典』（東奥日報社　1981）

● レファレンス申込み及び問い合わせ先 ●
青森県立図書館　参考・郷土室　電話 017-729-4311　FAX017-762-1757
電子メール　sanko@plib.pref.aomori.lg.jp

弘前市にある明治・大正期に建設された近代産業遺産「吉野町煉瓦倉庫」は建築家・田根剛氏によって改修され、「弘前れんが倉庫美術館」として 2020 年 4 月 11 日にオープンする予定です。

弘前市を中心とした津軽地方は洋風の歴史的建造物が多いといわれています。そのほとんどは明治・大正期に建築されていますが、昭和に入って地域開発による解体や焼失によって姿を消した歴史的建造物もあります。

今回は津軽地方の洋風建築について資料を紹介します。

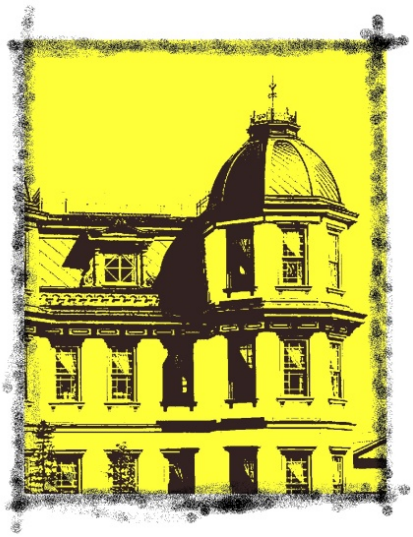
『棟梁堀江佐吉伝』（船水清著 白神書院 2004）

明治中期から後期にかけて重要文化財青森銀行記念館をはじめとする数々の洋風建築を後世に残した、青森県が誇る明治の代表的棟梁堀江佐吉（1845～1907、弘前城下覚仙町出身）について書かれた伝記。

佐吉が手掛けた各々の建築に関することが記されており、仕事の出来が気に入らないと損得を考えず理想通りに仕上がるまでやり直す性分であった、面倒見がよく弟子や兄弟を大事にしていたなど、佐吉の人となりについてもうかがい知ることができるいくつかのエピソードも紹介されています。

『津軽の西洋館』（工藤哲彦著 緑の笛豆本の会 1975）

限定 150 部の私家本。弘前にある１４の洋風建築を題材にした版画とともに、構造や景観について解説されています。本の表紙には旧弘前郵便局の版画が、背には落ち着いた色を基調としたカラフルな布が使用されている美しい本です。



『津軽の洋風建築』（草野和夫著 北方新社 1986）

明治後期から大正にかけて、弘前市を中心とする津軽地方で建設された多くの洋風建築について紹介しています。高度経済成長による再開発や焼失等で姿を消した洋風建築の貴重な写真とともに、それらの建築構造や建設までの経緯などが記されていて、当時の様子を知ることができます。

資料はいずれも館外への貸出が可能です。ご希望の方は職員にお尋ねください。

# ようこそ文学館へ！
## 近代文学館資料の紹介（第 34 回）

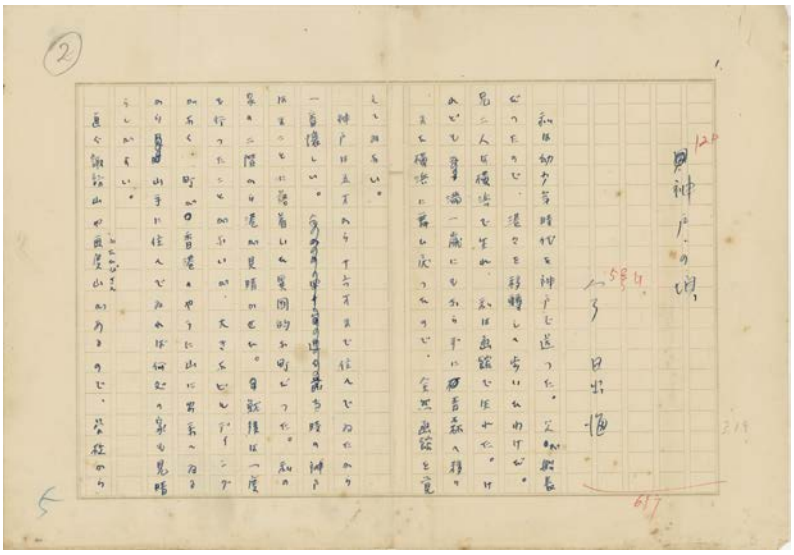
本号表紙でも取り上げました「今日出海展―直木賞受賞から 70 年―」（令和元年 10 月 26 日～令和２年１月 13 日）の展示資料から、２点ご紹介します。

### 『天皇の帽子』（昭和 25 年７月、ジープ社）

フィリピン従軍から奇跡的に生還した今日出海は、戦後１年ほど文部省に勤務した後、肺炎を患いました。療養中に再び小説を書き出し、昭和 24 年に日比谷出版社から刊行した『山中放浪』はベストセラーとなりました。「オール読物」昭和 25 年４月号に発表した「天皇の帽子」は、主人公・成田弥門が某侯爵から大正天皇着用の山高帽を贈られて変貌する様を描いた短篇です。この作品により日出海は、同年９月に第 23 回直木賞を受賞。その間に刊行された小説集『天皇の帽子』の初版本を当館では所蔵しています。

### 今日出海草稿「神戸の頃」

直木賞作家の今日出海ですが、幼い頃の足取りについては不明な点が多いです。父・武平が日本郵船に勤務していたため、一家は港町を転々としました。当館所蔵の草稿「神戸の頃」（掲載先未詳）には「私は函館で生れた。けれども満一歳にもならずに青森へ移り、」という一節があり、従来の年譜では言及されることのなかった、日出海が青森県に一時期在住した可能性を物語っています。



# カウンターからひとこと（第 33 回）

今回は“返本台”をご紹介します。
図書館で本を読んでいる時、こんなことはありませんか？

こんな時は是非、
返本台をご利用ください！

【一般室　返本台】

**返本台の使い方**

利用した本を返本台に置いてください。
返本台に置かれた本は、職員が随時回収し、元の場所へ配架しています。
返本台は一般室内に９ヶ所設置しています。

**注意**

**〇返本台に置いてよいもの**
自分で棚から取り出した本
**×返本台に置いてはいけないもの**
カウンターで手続きをした本
※貸出した本や書庫から出してきた本は
直接カウンターへご返却ください。

【児童室　返本台】

図書館では本を決められた順に並べています。そのため、取り出した本を本来あるべきではない場所に置いてしまうと、見つけられなくなってしまいます。元の場所が分からない本は、返本台へ置いてください。